

△井筒▽後シテ登場段の習事

山中玲子

室町末期以降の△井筒▽の習事としては、

「形見の直衣手に触れて」或は「月ぞさやけき」の後に働キ事を入れるという特殊演出が既に紹介されて有名だが、より早い時期から同曲の習事として伝書類に繰り返し記されるのは、後シテの出から序ノ舞にかけての部分の演奏の仕方に関するものである。それらは伝書・付類の記事の常として、少しずつ内容が違ったり複数の要素が絡み合ったりしているが、昔の名人上手達は△井筒▽という名曲をどう理解し、その世界を創りあげるためにどんな工夫を重ねてきたか、整理しつつ眺めてみたいと思う。

この部分に関する比較的早い時期の説を二つあげてみよう。(句説点・濁点等を適宜付してある。以下同様)

一、井筒の舞の事。出端より序に成候心持出はは序、序ハ出はと心へべし。又は仏の原・夕顔の上、此等のたぐひなるべし。

(彰考館蔵『離子方習書』所収)

「与五郎権守伝書」

一、井筒の能に口伝多之。サシコエ・一声・ジョノ舞ナレバ、三打分てハやすべシ。

(『細川五部伝書』能之口伝聞書所収)

「大蔵九郎能氏鼓伝書」

一声で出てきた後シテが曲舞の後奏舞ではない独立した序ノ舞を舞うのは、△井筒・夕顔・仏の原▽の三曲のみだが、ノリの良い一声の離子から、神舞や早舞ではなく序へ繋いでいく位の取り方の難しさが、先ず注目されたようである。さらに、△夕顔・仏の原▽は、後シテの出と序ノ舞の間にワキとの掛合があるが、△井筒▽だけはシテ一人の謡(サシ・一セイ)で繋げていくわけで、しかもそこは、恋人の形見の直衣を身につけることで井筒の女の恋慕の想いが次第に昂まり、同時にシテの性別が男と女の間で微妙に揺れていく、この曲の最も重要なポイントの部分でもある。

その変化を表現するための謡い分け・打ち分けに心が砕かれたのは当然で、宮増弥左衛門の『小鼓口伝集』(鴻山文庫蔵)や、『細川五部伝書』所収「節章句秘伝之抄」など、他の

伝書にも同種の記事が多く見られる。その場合、現在の小段とは少しずれて、「形見の直衣」(サシ)から一セイの心持ち、「恥ずかしや」(一セイ)から序の心持ちで、という説が多い。

この習事が基本となるものだろうが、ここに「越・不越」「男博士・女博士」等の説が結び付き、以下のような複雑な諸説を生み出して行く。ABCともに江戸期の伝書で、先の二説よりは一時代後の代表的な説である。

A 一、井筒一声不越。こせば三度こすと也。

(鴻山文庫蔵『小鼓謡伝書』)

B 井筒一セイ、中ノ打切ト二ノ句ト「形見の直し」ト云所ニテ打切八ツ从ヲ打、「昔男にうつり舞」ト云打切迄ニ打留ル事、是ヲ三段ノ一セイト云…

(某氏蔵離子伝書『雑書』)

C 一、井筒に三段ト云習の事。脇、「いもせをかけてとぶらはん」と云時に、まづ一声を一句打也。①さて、次第になして、又あいの謡に、「答のむしろにふしにけり」ト云所に、一句、次第を打也。②さて、一声を打て、

仕手を出スベシ。こしハ三度打也。③是、ならひある事也。…(『幸正能口伝書』)

BはAの傍線部の具体的な説明であり、また、Cの『幸正能口伝書』は別の箇所、ABCの説を「三段の一声」という名で世間に広まっ

ている誤った説だとしている。

Aで△井筒Vの一声に越の段を打たないというのは現代の感覚からすれば意外だが、これは型付にもよく出てくる結構有名な説である。一声を越すか越さないかは、次のような原則に拠るらしい(能楽研究所蔵『拍子口之巻』の記事に拠る)。

(ア)位の高い曲は越す。低い曲は越さない。

(イ)シテの謡が一セイのものは越す。サシのものは越さない。

(ウ)現在の能は位に関わらず越す。物狂能もみな越す。

(シ)シテが作り物から出る時は越さない。

△井筒Vの一声を不越とする条件として当てはまるのは(イ)だけだが、中入前の「井筒の陰に隠れけり」という謡から、(ウ)に準じて後シテが井筒の陰から登場すると考え、不越としているように、それが又一つの習事になっている。但し、この曲の位の高さは否否難いので(ウ)によって越すことも有る、と付け加える説が多い。その場合に三度も越を打つのはいかにもわざとらしいが、その三度目を「形見の直衣身に触れて」の謡に打ち込むというのは、前述の三つに打ち分ける説を承けたものでもあり、シテの心の高揚を印象づける優れた演出になっていると言えよう。

Cで述べられているのはおおよそ次のよう

な事だろう。即ち、①前場でワキが「妹背をかけて」と謡うのは、業平(男)と有常娘(女)の兩人を、ということなので、女姿の後シテが登場する次第の躰子の前に、男姿の後シテ登場の一声の手を一句打ち、②同様に後場の待謡には前シテの出の次第を一句打って陰陽和合をはかり、③その上で一声に越を三度打つ(これはA Bと同じか)この①②③を全て行なうのが正式の「三段の一声」である、と。こうなってくると理屈が表に立ちすぎて、実際の舞台でどれだけ効果が上がるか疑問ではあるが、これも又、シテの両性具有的な性格に几帳面に対応しようとした一つの工夫である。

この他、後シテが指貫を着け太力を帯いて出る時や、冠の纓を外して出る時の一声の位についての説等も出てくるが、「三段の一声」同様、どれも現在では行われず、むしろ古くからの「謡い分け・打ち分け」の説の方が、作品世界に添った工夫として現在の演奏にまで残っている。世阿弥が「上花也」と自讃した名曲に余計な手出しは無用という事なのかもしれない。

(注)中村格「室町末期の女能——『井筒』の場合——」(東京学芸大学紀要25集・昭49・1)

(法政大学能楽研究所員)